

爲スナリ

債權ニ付キ十年ノ特例ヲ設ケシ理由如何、債權ハ物權ニ比シテ證明ノ方法幾分
カ困難ナルヲ以テ不行使アルハ早ク之ヲ消滅セシムルハ自ラ公益ニ適スヘシ、
然ルニ此特例即チ第一項ノ規定ハ元來草案ニ存在セザリシヲ衆議院特別委員
會ニ於テ追加シタルモノナリ、而シテ該會カ之ヲ追加シタル理由ハ主トシテ從來
ノ出訴期限法ニ於テ有期ノ債權ハ五年ニシテ時効ニ罹ルモノナリシニ今俄ニ
其期間ヲ四倍シテ二十年トスルハ不妥ノ處置ニシテ或ハ權利上ニ劇變ヲ來シ、
取引上ノ擾亂ヲ免レサルヘシト云フニ在リ、而シテ各種取引中ニ於テ債權關係ハ
最モ頻繁ナルヲ以テ此關係ニシテ永ク不確定ノ狀態ニ在ルハ大ニ事業ノ發
達ヲ妨ケ社會ノ進歩ヲ害スルノ恐ナシトセス、故ニ債權ハ他ノ權利ヨリモ時効
期間ヲ短クスルヲ外國ニ於テモ亦其例ヲ見ルト云フハ亦其一理由タリシナリ

第六十八條

定期金ノ債權ハ第一回ノ辨濟期ヨリ二十年間之ヲ行ハサルニ因リテ消滅ス
最後ノ辨濟期ヨリ十年間之ヲ行ハサルトキ亦同シ
定期金ノ債權者ハ時効中斷ノ證ヲ得ル爲メ何時ニテモ其債務者ノ承認書ヲ求ムルコトヲ

得

總 則 編

本條ハ前條第一項ノ例外ヲ設ケタルモノナリ
定期金ノ債權トハ主タル權利ナクシテ定期ニ辨濟ヲ受クル債權ヲ云ヒ、從來年
金權ト稱セシモノナルカ其辨濟期ハ必シモ毎一年ニ非ス、月、半年又ハ數年等ト
爲ス、モ亦自由ナルモノナレハ年金ト稱スルノ不當タル場合アルヲ避ケンカ爲
メ之ヲ定期金ト改稱シタルナリ、而シテ其目的物ハ必シモ金錢ニ限ラス米穀等ヲ
以テスルコトアル可ク之ヲ定期金ト稱スルハ金錢ヲ以テ通例ト爲スカ故ナリ
所謂主タル權利ナクシテ下ハ之ヲ利息ト區別センカ爲ニシテ利息モ亦定期ニ
辨濟ヲ受クルモノタルモ是レ主タル權利ノ爲メ其附從トシテ之ヲ受クルノ權
利アルニ過ス、而シテ定期金ノ債權ハ之ニ異ナリ、單ニ定期ニ辨濟ヲ受クルヲ以テ
唯一ノ權利ト爲ス債權ニシテ有期又ハ無期ノ定期金權條第六百八十九
權又ハ供給契約ヨリ生スル權利ノ如キ是ナリ
此定期金ノ債權ハ其效果トシテ各辨濟期ノ定期金其モノニ對スル權利ヲ生ス、
例ヘハ甲カ乙ノ終身間之ニ對シテ毎年、金千圓ヲ贈與セント契約シタルキハ乙

總 則 編

ハ自己ノ修身間甲ヲシテ毎年金千圓ヲ支拂ハシムルノ債權ヲ有ス、此債權ハ則チ定期金ノ債權ナリ、而シテ乙ハ此債權ニ依リ其年ニ於テ千圓ノ請求權ヲ生シ、翌年以後亦年々之ヲ生ス、此既ニ到來シタル辨濟期ノ定期金其モノヲ請求スル權利ノ消滅時効ハ次條ニ依リ五個年トス、然リ而シテ其基本タル債權ノ消滅時効ハ則チ本條ニ依ル、蓋シ本條ノ定期金ノ債權トハ其基本權ニシテ次條ノ權利トハ恰モ母子ノ關係タリ、本條ノ攻究ニ於テハ先ツ此區別ヲ明ニセンコトヲ要ス、定期金ノ債權ノ何モノタルコトハ既ニ明ナリ、次ニ明ニス可キハ此債權ノ消滅時効ニ於ケル起算點如何ノ問題是ナリ、元來消滅時効ノ起算點ハ其權利ヲ行使シ得ル時ニ在リ第百六十六條第一項、而シテ此定期金ノ債權ハ之ヲ行使シ得ル時ハ何時ナリヤト云フニ、本條ニ關スルニ著者ノ說各異ナリ、甲ハ最後ノ辨濟期ノ到來セシ時ト爲シ乙ハ第一回ノ辨濟期ノ到來セシ時ト爲ス、故ニ甲說ニ依レハ第一項前段ノ規定ハ起算點ト期間トノ二點ニ於テ共ニ普通原則第百六十六條及七次條ノ例外ヲ爲シ、後段ノ規定ハ却テ其原則ニ從フモノト爲ル、乙說ハ之ニ反シ前段ノ起算點ト後段ノ期間トハ原則ニ從ヒ前段ノ期間ト後段ノ起算點トハ例外ヲ爲スモノナリ、

總 則 編

然レモ是レ固ヨリ乙說ヲ以テ其正鵠ヲ得タリト爲ス可ク、即チ本條第一項ハ前段ヲ以テ單ニ前條ノ期間ニ對スル例外ヲ設ケ、而シテ後段ハ此例外ト前條原則トノ間ニ權衡ヲ得セシムルカ爲メ例外トシテ一特例ヲ附加セシニ過ス、左ニ聊カ之ヲ論セム

此起算點ニ關スル見解ハ二著者共ニ其理由ヲ説明セス、殆ト獨斷的ニ其見解ヲ記セシニ止マルモ甲ノ意タル定期金債權ハ定期金全部ノ請求權ニシテ全部ノ請求權ヲ完全ニ行使シ得ヘキハ最後ノ辨濟期ノ到來セシ時ニ在リト云フモノ、如シ、而シテ乙ハ別ニ説明ヲ須キストノ意ナルカ如シ、然リ是レ殆ト説明ヲ須キサレモ唯甲說アルニ因リ少シク之ヲ辨セサルヲ得ス、各辨濟期ノ定期金全部ヲ請求スルノ權利ハ固ヨリ甲說ノ如ク最後ノ辨濟期ニ至ラサレハ之ヲ行使シ得サルノミナラス權利其モノモ亦發生セサルナリ、然レモ各辨濟期ノ定期金請求權ト定期金ノ債權即チ基本權トハ前述ノ如ク各別ニシテ本末、体用ノ關係ヲ成シ、基本權ノ活動トシテ各定期金ノ請求權ヲ生スルモノナレハ其各定期金ヲ請求スルハ即チ基本權ノ行使ニ外ナラス、故ニ第一回ノ辨濟期ニ於テ其期ノ定期

金ヲ請求スルハ此時ヨリ既ニ基本權ヲ行使スルモノニシテ爾後各期ノ定期金ヲ請求スルハ固ヨリ其期限ノ到來ヲ待ツ可ク、隨テ各定期金全部ヲ請求スルハ最後ノ辨濟期ノ到來ヲ待タサル可カラスト雖モ、是ニ依テ其時ニ非サレハ定期金債權ノ行使ヲ得サルモノト爲スハ誤見モ亦太甚シ、是ヲ以テ定期金ノ債權ハ當然第一回ノ辨濟期ヲ以テ其權利ヲ行使スルヲ得ル時ト爲スモノニシテ隨テ第一項前段ハ第六十六條第一項ノ原則ノ適用ニ過ス、第一回ノ辨濟期ヨリトノ九字ヲ削ルモ亦當然此ノ如クナル可ク、其特ニ之ヲ書セシハ甲說ノ如キ誤見ヲ豫防シ後段ノ「最後辨濟期ヨリ起算スル例外ト區別センカ爲メニ外ナラス」夫レ此ノ如ク定期金債權ノ消滅時効ヲ其第一回辨濟期ヨリ起算スルハ固ヨリ原則ノ適用ニ過ス、而シテ第一項前段ハ其期間ニ付テノミ前條第一項ノ例外ヲ設ケ之ヲ二十年ト爲シタルモノナリ、蓋シ定期金債權ハ其總期間タル數年十數年若クハ數十年ノ長キニ涉リ殊ニ無期ノモノスラアルニ其第一回辨濟期ヨリ起算シ前條原則ノ如ク僅々十年ニシテ消滅スルトセハ其總期間未タ終ラス、又ハ其總期間ノ數分ノ一ニシテ消滅スルカ如キ場合屢生シ頗ル短期ニ過クルノ

總 則 編

總 則 編

弊アリ却テ前條原則ト其權衡ヲ得ス、是レ之ヲ二十年ト爲シタル所以ナリ茲ニ此第一回ノ辨濟期ト云ヘルニ付キ注意ス可キモノアリ、此語ハ債權成立ノ當初ヨリ一タヒモ定期金ヲ辨濟セサリシ場合ヲ主トシテ想像シ乃チ第一回ノ辨濟期ト書セシモノナルモ、若シ一回又ハ數回辨濟ヲ爲セシ後ヨリ其辨濟ヲ怠リシキハ此語ハ之ヲ「其辨濟ヲ怠リシ最初ノ辨濟期」ト解セサル可カラス、何トナレハ其辨濟ヲ怠リシ以後ニ非サレハ債權者ノ權利不行使ト爲ス可カラサレハナリ

一例ヲ設ケテ以上ノ趣旨ヲ明ニセンニ、明治三十年一月中ニ甲カ乙ト契約シ今年ヨリ三十年間毎年末日ニ金千圓ツ、ヲ乙ニ與フルト爲シタリトセヨ、此場合ニ甲カ其明治三十年ノ末日ニ千圓ノ辨濟ヲ爲サス、爾後亦更ニ之ヲ爲サ、リシキハ其明治三十年ノ末日ヨリ起算スルモ若シ此年ニ辨濟ヲ爲シ翌年亦辨濟シ明治三十二年末日ヨリ之ヲ怠リシキハ則チ其末日ヨリ起算ス、故ニ此後ノ場合ハ明治三十二年末日ヨリ二十年間即チ明治五十二年末日ニ至リ時効完成ス可シ、而シテ時効ノ效力ハ既往第四百四十四條將來ニ共ニ及ホスヲ以テ此定期金債權モ亦

既往ト將來トニ別ナク全ク消滅ニ歸ス、然ルニ既ニ到來シタル各辨濟期ノ定期金ハ每五個年ニシテ各自ニ消滅シ去ルモノ條次ナルヲ以テ此明治五十二年末日ニ於テハ其時ヨリ五年前ニ至ル十五年間ノ定期金即チ明治三十二年末日ヨリ明治四十七年末日マテ毎年ノ年金千圓ツ、ハ次條ノ適用ニ因リ業ニ既ニ消滅セルモノニシテ剩ス所ハ明治四十八年以後ノ年金ノミニ屬シ、同年以後五十二年末日マテ即チ最近五個年ノ年金五個年ノ期間未滿ノ爲メ未タ次條ニ依リ消滅セザリシモノナルヲ此定期金債權即チ其年金ノ基本權カ本條ニ依リ消滅ニ歸スルカ爲メ第四百四十四條ノ適用ニ依リ右既往五個年分ノ年金請求權モ亦消滅ニ歸スルモノトス、然リ而シテ此年金契約ハ明治三十年ヨリ三十個年即チ明治六十年ニ及フモノニシテ此明治五十二年ニ於テハ將來尙ホ八個年ノ殘期アルモノナレバ其殘期モ亦此時效ニ依リ消滅スルヤ言フ俟タス、故ニ之ヲ約言スレハ此年金債權ハ其約定期間三十個年ノ中ニ於テ最初二個年分ハ完全ニ履行セラレ、次ノ十五個年分ハ次條ニ依リ消滅シ、次ノ五個年分ハ本條ト第四百四十四條トノ適用ニ依リ消滅シ、又最後ノ八個年ハ本條ニ依リ消滅スルモノナリ、但其辨濟

總 則 編

總

則

編

期カ年以上ニテ定メラレタルハ、例ヘハ每二年ニ辨濟ス可キモノナルハ次條ニ依ラスシテ前條第一項ニ依リ十個年ノ時效タルヲ以テ此定期金債權カ二十個年ニシテ消滅スルハ即チ明治五十二年ニ於テハ既往十年間即チ五回分ノ定期金ハ未タ消滅セスシテ殘存セルニ因リ本條基本權消滅ノ效果ニ依リ消滅スルモノナリ次條參照

以上第一項前段ノ規則ニ對シテハ其例外タル後段ノ一特例アリ、即チ第一回辨濟期ヨリ起算シテ二十個年ヲ經レバ前段ニ依リ時效完成スルモ此ト同時ニ其最後辨濟期ヨリ起算シテ十個年ヲ經ルハ後段ヲ以テ亦時效完成ス、蓋シ此最後辨濟期ヨリ起算スルハ第六十六條第一項ノ例外タルモ其起算點ヲ遅クセシ結果トシテ其期間ヲ短縮シ此ノ如ク十個年ト爲シタリ、故ニ此定期金債權ハ第一回辨濟期ヨリ起算シテ二十個年ト最後辨濟期ヨリ起算シテ十個年ト孰レカ早ク到着シタル方ニ從ヒ消滅スルモノナリ、此規則ハ主トシテ十年未滿ノ期間ヲ以テ其辨濟ヲ終ル可キ定期金債權ニ適用セララル、モノニシテ例ヘハ甲カ爾後五年間年金百圓ツ、ヲ乙ニ與ヘント約シ一回モ之ヲ履行セザリシハ

總 則 編

ノ如キ若シ前段ノ規則ニ從ヘハ最初ヨリ二十个年ナルヲ以テ五个年滿了ノ時即チ最後ノ辨濟期ヨリ十五个年ノ後ニ非サレハ時効完成セサルト爲リ前條ニ於ケル普通債權ノ十年ヲ以テ消滅スルモノト大ニ權衡ヲ失スルヲ以テ乃チ此特例ヲ設ケ第一回辨濟期ヨリ二十年ト爲ラサルモ最後辨濟期ヨリ十年タレハ亦消滅スルト爲シタルナリ故ニ實際此後段ノ規則ノ適用セラルハ右十年未滿ノ期間ヲ以テスル契約ノ外此ヨリ長キ期間ヲ以セル契約カ十年未滿ニテ消滅セシモノ例ヘハ終身定期金債權ニ於テ其人カ十年未滿ニ死亡セシキ又ハ解除條件附ノモノカ十年未滿ニ成就セシキ及ヒ履行ヲ怠リシ殘期カ十年未滿タルモノ例ヘハ三十年間ノ契約ニ於テ二十年以上每期辨濟シ爾後數年履行セサル片等ニ在ルナリ

且此後段ノ規則ハ年以下ヲ以テセル定期金債權ニハ總テ其適用ヲ見サル可シ是レ年以下ノ定期金ハ其各期ノ定期金カ皆次條ニ依リテ五个年毎ニ消滅シ最後辨濟期ヨリ五年ニ達セシキハ債權者ハ一モ請求ス可キモノ無ケレハナリ故ニ年ヨリ長キ時期ヲ以テセル定期金債權ニ於テ始テ其適用ヲ見ルノミ

總 則 編

第二項ハ定期金債權者ヲ保護シテ特ニ其時効中斷ノ證據ヲ得セシムルモノナリ元來此債權者モ亦總テノ方法第四百四十七條ニ依リ時効ヲ中斷スルヲ得ヘク殊ニ其債務者カ各辨濟期ニ於テ定期金ヲ辨濟スルハ即チ其債權ニ對スル承認タルモノニシテ此承認ニ依リ時効ハ當然中斷ス可シ然レモ此辨濟即チ承認アリタルヲ證明スルハ債權者ニ在テ最モ困難ノ業タリ何トナレハ債權者カ債務者ヨリ辨濟ヲ受ケタル片ハ一々其受取證書ヲ債權者ニ與フ可キモ債務者カ辨濟ヲ爲シタル證書ヲ債權者ニ與フルカ如キハ決シテ無キ所ニシテ隨テ債務者ハ其證據ヲ有スルモ債權者ハ之ヲ有セサルヲ常トスレハナリ是故ニ無期又ハ數十年ノ定期金債權ニ關シテハ債務者ハ第一回ノ辨濟期ヨリ毎回其定期金ヲ辨濟シ來リ二十年ニ及ンテ突然其辨濟ヲ肯セス此債權ハ時効ニ因リ既ニ消滅シタリト主張ス可シ此場合ニ債權者ハ當初ノ契約書等ヲ有スルモ其書面ノ日附ヨリハ既ニ二十年以上ヲ過キ而シテ其間殊ニ昨年マテ辨濟アリテ承認ニ因リ中斷セリト主張スルモ其證據ヲ有セス遂ニ其債權ヲ執行シ得サルニ至ラン於是乎第二項ハ此ノ如キ債權者ヲ保護センカ爲メ何時ニテモ其債務者ニ對シテ承

總 則 編

認書ヲ求ムルヲ得セシメ以テ容易ニ其中斷ノ證明ヲ得セシムルモノナリ
 此承認書ヲ求ムルハ何時ニテモ可ナリ舊法典ハ時効期間ヲ三十年トシ此承認
 書ヲ求ムルハ二十八年以後ニ限ル五十二條トセシカ證據編第百本法ハ之ヲ採ラス即
 チ承認書ヲ作ルハ別段ノ煩勞ヲ要セサルヲ以テ何時之ヲ求ムルモ債務者ニ非
 常ノ累ヲ加フルヲ無カル可キニ因リ債權發生後三年五年ニテモ妨ナク且一回
 ニ限ラス數回之ヲ求ムルモ亦妨ナカル可シ而シテ債務者若シ之ヲ承諾セサルキ
 ハ裁判所ニ認求シテ之ヲ作ラシムルヲ得ルヤ知ル可キナリ同上第五十二
條第三項參看
 承認書調製ノ費用ニ付テハ舊法典ハ其負擔者ヲ詳定セシモ本條ハ之ニ言及セ
 ス故ニ本法ニ於テハ債務者カ任意ニ調製セシ場合ト裁判上ノ要求ニ因ル場合
 トニ論ナク總テ債務者單獨ニ之ヲ負擔ス可シ是レ理論上當サニ然ルヘキノミ
 ナラス我立法者ノ意向モ亦固ヨリ茲ニ在リシナリ

第六十九條 年又ハ之ヨリ短キ時期ヲ以テ定メタル金錢其他ノ物ノ給付ヲ目的トスル債
 權ハ五年間之ヲ行ハサルニ因リテ消滅ス

本條以下ハ短期時効ニ關スルモノニシテ本條ハ其五個年ノ時効ヲ定メタルモ
 ノナリ

總 則 編

短期ノ時効ハ皆債權ニ關スルモノナルカ其債權タル各特別ノ性質アルヲ以テ
 第六十七條第一項ノ原則ニ從ハシムルヲ得ス乃チ特別ニ其期間ヲ短縮シタ
 ルモノナリ蓋シ此種ノ債權ハ嚴正ニ辨濟セサレハ債權者ノ生活其他ニ支障ヲ
 來スヲ多キヲ以テ債權者ハ久シク其請求ヲ怠ルヲ無キヲ通例トス殊ニ此等ノ
 債權ハ日常發生スルヲ最モ繁ク而シテ其額ハ通常甚タ多カラサルヲ以テ一々其
 證書ヲ作ルノ煩勞ヲ執ル者少ナク債權ノ證書ヲ交附セサルト共ニ辨濟ノ證書
 ヲモ付與セス或ハ之ヲ付與スルモ長ク之ヲ保存スルヲ最モ稀ナリ故ニ長久ノ
 時日ヲ經タル後ニ至リ此債權ヲ執行セントシ若クハ其債務ヲ免レタルヲ主
 張セントスルモ其證明甚タ困難ニシテ屢事實ニ反スル不當ノ結果ヲ生スルニ
 至ラン是レ此等ノ債權ニ關シテハ其時効期間ヲ短縮シ速ニ權利ノ不確定ノ狀
 態ニ在ルヲ免レシムル所以ナリ

以上總テノ短期時効ニ關スル理由ノ外本條ニ付テハ更ニ一ノ特別ナル理由アリ
 債務者ノ保護是ナリ本條ノ債權ハ次ニ説明ス可キカ如ク年々ニ又ハ每半年

毎月等ニ生スルモノ、即チ利息ノ類ナルカ、塵芥ノ微モ堆積セハ以テ邱阜ヲ成ス可ク、此種ノ債權ハ數年ノ久シキ之ヲ請求セサレハ其額遞加累積シテ意外ノ巨額ニ上ル可ク、此時ニ及ンテ一朝突然之ヲ請求セハ債務者ハ或ハ破産ノ不幸ヲ免レサルニ至ラン、然ルニ毎月毎年等每期ニ之ヲ請求セハ債務者ハ裕別ノ苦痛ヲ減セスシテ之ヲ辨濟スルヲ得ヘシ、是ヲ以テ債權者ヲシテ數年間其請求ヲ怠ルカ如キヲ勿ラシメ以テ債務者ヲ保護センカ爲メ乃チ五十年ニシテ消滅スルコト爲シタルナリ

總 則 編

本條ノ債權ハ舊法典ニ於テハ例示法ヲ採リ且原則ヲ加ヘテ之ヲ補ヒシモ編註第六百條本法ハ例示法ノ却テ疑義ヲ生スル等ノ不利ヲ避ケ單ニ原則ヲ揭ケテ年又ハ之ヨリ短キ時期ヲ以テ定メタル金錢其他ノ物ノ給付ヲ目的トスル債權ト爲シ、此原則ニ適ス可キ各種ノ債權ハ總テ之ニ包含スルコト爲シタリ

年又ハ之ヨリ短キ時期トハ一年以下ノ時期即チ年、月、週、日、時ヲ以テ定メタル時期例ヘハ毎年、每半年、每三个月、毎月、隔週、每十日等ト云ヘルノ類ニシテ某學士カ每二年ノ例ヲ擧ケシハ誤レリ、每二年等年以上ノ時期ヲ定メタルモノハ第六百

總 則 編

十七條第一項ノ原則ニ從フモノナリ、而シテ定期金、利息、借地賃、借家賃、給料、恩給、養料等ノ一年以下ノ時期ヲ以テ定メタルモノ、各期ノ辨濟金ニ對スル債權ハ則チ恰モ本條ノ適例タリトス

此債權ニ付テハ時日ノ長キニ應シ遞加スル性質アルヲ要シ、單ニ一定ノ額ニ至ルニ止マリ、其以上ハ増加セサルモノハ本條ニ包含セスト説ク者アリ、此説ニ依レハ利息ノ如キ總額ノ豫定ナク、唯毎年若クハ毎月若干トシテ逐次累積スルモノニ限り一定ノ債務ヲ年賦若クハ月賦ニテ辨濟スルモノ、如キハ茲ニ包含セサルコト爲ル、果シテ然ラハ有期ノ定期金又ハ借賃ノ如キモ亦一定ノ期間ニ至リ一定ノ金額ニ達スルニ止マリ年月ト共ニ無限ニ遞加スルモノニ非サルヲ以テ亦包含セスト爲サ、ル可カラス、然レモ本條法文ハ何等ノ區別ヲモ爲サズ單ニ年以下ノ時期ヲ以テ定メタル債權ト云フニ過サレハ余ハ總テ本條ニ包含スルヲ至當ナリト信ス、蓋シ年月ト共ニ無限ニ遞加スルモノハ債務者ヲ保護シテ時効ヲ短期ニスルノ必要一層緊切ナリト雖モ、遞加ノ無限ナルト有限ナルトニ論ナク總テ數年ヲ經過シテ一時ニ數年分ヲ請求スレハ債務者ニ對シ困難ヲ與

フルハ大差ナキヲ以テ彼此ノ間ニ區別ヲ設クルノ理由ナシ、年賦辨濟ノ如キモ債務總額ヲ一時ニ辨濟スルハ債務者ノ堪エサル所ナルヲ以テ乃チ年賦ノ方法ヲ設ケ年々若干ノ小額ツ、ヲ以テ不知不識ノ間ニ之ヲ完濟セントスルモノナルニ、數十年分ヲモ併セテ一時ニ請求スルニ至ラハ債務者ハ或ハ破産ヲ免レサルヘシ、是レ亦恰モ本條ノ保護ヲ要スルモノニシテ法文カ何等ノ區別ヲモ爲サ、ルハ則チ汎ク之ヲ包含セシムルニ外ナラサルナリ

〔其他ノ物ノ給付〕トハ金錢以外ノ有價物ヲ云ヒ、小作米ノ如キ供給契約ノ各期ノ供給例ヘハ日用品ヲ毎月若干供給スルカ如キ工場ニ石炭ヲ供給スルカ如キ是ナリ

上述諸種ノ債權即チ其各一期ノ給付ニ對スル債權ハ五年間ニシテ消滅ス、故ニ其消滅ハ各期ノ給付ニ付キ盡ク時期ヲ異ニシ例ヘハ千圓ノ年金(基本タル定期金ノ債權ニアラス)ニ付テハ明治三十年分ノ千圓ハ明治三十五年ニ三十一年分ノ千圓ハ三十六年分ニ時効完成シテ漸次消滅ニ歸スルナリ

第七十條 左ニ掲ケタル債權ハ三年間之ヲ行ハサルニ因リテ消滅ス

一 醫師、產婆及ヒ藥劑師ノ治術、勤勞及ヒ調劑ニ關スル債權

二 技師、棟梁及ヒ請負人ノ工事ニ關スル債權但此時効ハ其負擔シタル工事終了ノ時ヨリ之ヲ起算ス

本條ハ債權ノ種類ニ關スル原則ヲ掲ケスシテ單ニ其種類ヲ列舉シタリ、故ニ妄リニ之ヲ類推シテ他ノ債權ニ適用スルコトヲ得ス、然レモ亦妄リニ文字ニ拘泥スルコト無ク廣義ニ之ヲ解釋シテ全ク同種ノモノハ之ニ包含スルコト爲サ、ル可カラス

第一號 法文「治術」ハ「醫師」ニ係リ「勤勞」ハ「產婆」ニ係リ「調劑」ハ「藥劑師」ニ係ルヲ主トスルモ亦必シモ然ラス、醫師ニシテ治術以外ノ或勤勞ヲ爲スコトアリ、又其「調劑」ヲ爲スハ本邦普通ノ慣習タリ、故ニ其勤勞及ヒ調劑ニ關スル債權モ亦本號ニ入ルモノトス、即チ上ノ「醫師、產婆及ヒ藥劑師」ノ三語一句ヲ成シ、下ノ「治術、勤勞及ヒ調劑」ノ三語亦一句ヲ成シ、以テ二句相關聯スルモノナリ

本號ハ醫師ト云ヒ產婆ト云ヒ特種ノ名稱ヲ擧ケテ明記セルモ之ヲ此三者ニ限ルニ非ス、即チ本號ハ疾病治療ノ爲ニ必要ナル技術者ノ債權ヲ指稱スルノ意ニ

總 則 編

總 則 編

總 則 編

シテ、齒科醫、獸醫等ハ勿論、看護婦等ノ勤勞ニ關スル債權モ亦之ニ包含ス
 本號ノ債權ニ於ケル三年ノ時効ノ起算點ハ其謝金又ハ代金ノ支拂期ニ在リ、而
 ノ其支拂期ハ事實ニ依リ之ヲ定ムルノ外ナキモ藥劑師ニ關シテハ通例其調劑
 ノ日若クハ月末タリ、又一產婆ニ關シテハ其勤勞ヲ終リシ時即チ分娩ノ時タル
 ヘク、又醫師ニ關シテハ或ハ其時々タリ或ハ毎月月末タリ又或ハ七月十二月ノ二
 期タリ、各地ノ慣習ト當事者相互ノ關係トニ因リテ各同シカラサルヘシ
 第二號 本號ハ動産ニ關スルト不動産ニ關スルトヲ問ハス苟モ工事ト稱ス
 ヘキモノニ關スル債權ハ皆之ヲ包含ス、測量、製圖及ヒ設計ノ如キ亦之ヲ包含ス、
 而シテ其債權タル當タ技師等ヨリ其勞力ニ付キ請求スル債權ノミナラス技師等
 ニ對シ工事ニ關スル違約又ハ工事ノ瑕疵等ニ付キ請求スル債權モ亦包含ス、然
 レモ其工事ノ用材例ヘハ木材石材等ノ代價ニ關スル債權ハ固ヨリ包含セサル
 ナリ

本號債權ニ於ケル三年ノ時効ノ起算點ハ頗ル明確ナリ難キヲ以テ法文豫メ之
 ヲ定メ其負擔シタル工事終了ノ時ヨリト爲シタリ、是レ此等ノ債權ハ工事終了

總 則 編

ノ後之ヲ辨濟スルヲ慣習トスレハナリ、然レモ其負擔シタル工事トアルニ注意
 ス可ク複雑ナル工事ニ至リテハ各種ノ工事ヲ要シテ一ノ全工事ヲ落成スルモ
 ノタルヲ以テ其全工事終了ノ時ヨリ起算スルトセハ其時期甚タ長キニ失ス
 可ク、殊ニ實際ニ於テハ此等ノ場合ハ其各種ノ工事ノ終了スルニ從ヒ各別ニ支
 拂ヲ爲スヲ慣例トスルヲ以テ其時効モ亦各種ノ工事終了ヨリ各別ニ起算ス可
 シ、例ヘハ一ノ家屋ヲ設クルニハ首ニ地均ヲ爲シ、次ニ工匠ヲシテ建築ヲ爲サシ
 メ、其他坊工、家根工等ノ工事ヲ要ス、而シテ地均既ニ成レハ直チニ其地均請負人ニ
 支拂ヲ爲シ、次テ建築終了スレハ亦其工匠ニ支拂ヲ爲シ、坊工家根工亦各自ニ其
 終了ニ從ヒ支拂ヲ爲ス可ク、隨テ時効モ亦其支拂ヲ爲ス可カリシ時、即チ各工事
 終了ノ時ヨリ起算ス可シ、但此地均、建築其他一切ノ工事ヲ一手ニテ請負ヒタル
 片ハ其請負人ニ關スル債權ハ其全工事落成ノ時ヨリ起算ス可キヤ論ナキノミ
 第七十一條 辯護士ハ事件終了ノ時ヨリ公證人及ヒ執達吏ハ其職務執行ノ時ヨリ三年
 ヲ經過シタルトキハ其職務ニ關シテ受取リタル書類ニ付キ其責ヲ免ル

辯護士、公證人及ヒ執達吏カ其職務ニ關シテ受取リタル書類ニ付キ其責ヲ免ル

總 則 編

トハ返還ノ責ヲ免ル、ニテ必竟其書類ノ所有者カ其書類取戻ノ請求權ヲ失フモノナリ、故ニ前後諸條ハ皆債權ノ消滅時効ナルモ本條ノ時効ノ性質ハ物上請求權ノ消滅時効ナリト謂フ可シ、蓋シ辯護士等ハ其書類ヲ占有セシモ其占有タル所有ノ意思ナキ容假ノ占有ニ過サルヲ以テ其書類ニ付キ取得時効ヲ得ルノ理ナク、隨テ三年ヲ經テ本條ノ時効完成スルモ其書類現存セハ固ヨリ之ヲ返還スルヲ至當トシ、唯其現存セサル場合ニ於テ何等ノ責任ヲモ負ハス、書類所有者モ亦強ヒテ取戻スノ權利ナク且要償ノ權利ナシト云フニ過サルナリ

然リ而シテ此時効ヲ設ケシハ他故ナシ、辯護士等ハ事件終了若クハ職務執行ノ後ハ直チニ其書類ヲ返還スルヲ通例トスルノミナラス、日々數多ノ書類ヲ取扱フモノニシテ之ヲ返還スルニ一々其受取證ヲ取ルヲ無ク、縱令之ヲ取ルモ長ク之ヲ保存スルモノニ非ス、然ルニ經久ノ後尙ホ責任ヲ負ハシメハ其迷惑タル實ニ鮮少ナラス、是レ其時効ヲ短期ニシ以テ之ヲ保護スル所以ナリ

「事件終了ノ時」トハ訴訟ヲ取下ケタル時、當事者カ和解ヲ爲シタル時又ハ裁判言渡アリタル時等ヲ云フ、是レ書類ヲ返還ス可キ時ナルヲ以テ時効ハ宜シク此時

總 則 編

ヨリ起算スヘキナリ、而シテ事件終了前ニ關係ヲ絶チタル時、即チ訴訟代理人タルヲ解任若クハ辭任シタルキハ之ヲ「事件終了ノ時」ト云フ可カラサルモ時効ハ固ヨリ此時ヨリ起算セサル可カラズ、是レ亦書類ヲ返還ス可キ時ナレハナリ

「職務執行ノ時」トハ公正證書調製ノ時、強制執行ヲ爲シタル時等ヲ云フ、是レ亦證書返還ノ時ナルヲ以テ時効ノ起算點タルナリ、但「執行ノ時」トハ執行ノ終リタル時ト解ス可ク、其數日ニ渉ルモノハ最後ノ日ヨリ起算セサル可カラズ、職務ヲ未ダ執行セス、又ハ未タ其執行ヲ終ラサル前ニ關係ヲ絶チタル時ハ其時ヨリ起算ス可キヲ亦前段ニ同シ

本條時効ノ目的物ハ上來所述ノ如ク書類ノミニ限リ、且職務ニ關シテ受取リタルモノニ限ル、故ニ單純ノ一個人トシテ職務以外ニ於テ保管ヲ託サレタル書類ノ如キハ包含セス、又職務ニ關シテ受取リタルモノト雖モ書類以外ノ他ノ物件ハ包含セス、是レ想フニ他ノ物件ハ紛失滅失ノ虞少キニ因ルナルヘシ

第七十二條 辯護士、公證人及ヒ執達吏ノ職務ニ關スル債權ハ其原因タル事件終了ノ時ヨリ二年間之ヲ行ハサルニ因リテ消滅ス、但其事件中ノ各事項終了ノ時ヨリ五年ヲ經過シタル

トキハ右ノ期間内ト雖モ其事項ニ關スル債權ハ消滅ス

本條ハ辯護士公證人及ヒ執達吏ノ三者カ其依頼人ニ對シ職務上有セシ債權及ヒ其依頼人ヨリ右三者ニ對スル同種ノ債權ノミニ限ル、舊法典証據編第百八十八條ハ其他ノ公吏ヲモ汎ク包含セシカ本法ハ此三者ニ關スルモノニ限レリ、故ニ此三者ト依頼人トノ間ニ於ケル債權ト雖モ其職務以外ノ債權例ヘハ普通ノ貸金、借賃等ハ爰ニ包含セス

總 則 編

此等ノ債權ハ其債權ノ生シタル原因タル事件終了ノ時ヨリ起算シ二年ニシテ時効ニ罹ル、是レ此等ノ債權モ亦事件終了ノ時直チニ之ヲ辨濟スルヲ常トシ、久シク等閑ニ附スルヲ無キノミナラス其事件ノ複雜ニシテ債權ノ煩多ナル經久ノ後ニ證明スルハ最モ困難ナル可キヲ以テ其時効ハ一層短縮セサル可カラサルナリ

本條「事件終了ノ時」トハ前條ノ「事件終了ノ時」ト「職務執行ノ時」トノ二者ヲ併稱ス、辭ヲ以テ意ヲ害ス可カラス

然ルニ此事件ノ終了タルヤ往々ニシテ數年ノ久シキニ涉ルモノアリ、裁判ノ確

總 則 編

定ノ如キ其第一審ノ起訴ヨリシテ上告審ノ裁判言渡アルマテハ或ハ十餘年ニ至ルヲ無シトセス、此場合ニ尙ホ右ノ規定ニ從ヒ其終了ノ時ヨリ二年間トセハ債權發生ノ時ヨリ十餘年間消滅セサルヲト爲リ、本條カ此時効ヲ短縮セシ主旨ニ反シテ却テ普通ノ原則第百六十七條ヨリモ長期ノモノト爲ルノ結果ニ歸ス、於是乎本條ハ更ニ但書ヲ設ケテ右事件終了ノ時ヨリ二年ニ達セスト雖モ事件中ノ各事項終了ノ時ヨリ五年ヲ經過シタルハ其事項ニ關スル債權ハ消滅スルヲト爲シ、二者其早キニ從フテ時効ヲ完成セシムルモノトセリ

「其事件ノ中各事項」トハ一事件中ニ包含セラレテ而モ持立セル一債權ノ原因タル事項ヲ云フ例ヘハ一ノ訴訟ニ於テモ第一審、第二審、及ヒ上告審アリ、其各審ニ於ケル辯護士ノ代理行爲ハ其訴訟中ノ各事項タリトス

〔第七十三條 左ニ掲ケタル債權ハ二年間之ヲ行ハサルニ因リテ消滅ス

- 一 生産者、卸賣商人及ヒ小賣商人カ賣却シタル產物及ヒ商品ノ代價
- 二 居職人及ヒ製造人ノ仕事ニ關スル債權
- 三 生徒及ヒ習業者ノ教育、衣食及ヒ止宿ノ代料ニ關スル校主、塾主、教師及ヒ師匠ノ債權

本條列記ノ諸債權ハ亦日常ノ需用ヨリ生スモノニシテ其辨濟ハ通例最モ迅速ナル可ク、且其取引頻繁ニシテ一々證據ヲ具備シ得サルモノナルヲ以テ其債權ノ關係ヲ速ニ確定セシムルヲ必要トス、是レ亦其時効ノ期間ヲ短縮セシ所以ナリ

總

第一號 本號ハ日常需要品ヲ供給セシモノ、債權ニシテ彼ノ賣掛代金ニ外ナラス、故ニ左ノ二條件ヲ備フル場合ニ限ル

則

(一) 債權者ハ其商業上ニ於テ賣リシコト 其生産者ナルト卸賣商人ナルト將タ小賣商人ナルトヲ問ハス唯商人ニシテ其商業上ニ於テ賣リシコトヲ要ス、故ニ非商人カ物ヲ賣リシモノ及ヒ商人カ其營業外ニ於テ物ヲ賣リシモノ例ハハ吳服商カ書畫ヲ賣リ飲食商カ刀劔ヲ賣リシモノ、如キ債權ハ本號ニ包含セス、第一百六十七條第一項ノ原則ニ從フヘキナリ

編

(二) 債務者ハ其消費ノ爲メ買ヒシコト 即チ之ヲ買ヒシ者ハ商人ニ非ス消費者ナル可ク、自己ノ需要ノ爲ニ買ヒシ場合ニ限ル、故ニ生産者ヨリ卸賣商人ニ卸賣商人ヨリ小賣商人ニ其他商人相互ニ商業上賣買セシモノハ包含セス、尤モ商人ト

雖モ其商事外ニ於テ自己ノ消費ノ爲ニセシハ此限ニ在ラス、例ハハ吳服商カ自家飲料ノ酒ヲ買ヒ飲食商カ自家服裝用ノ吳服ヲ買ヒシカ如キハ則チ本號ニ包含ス

總

第二號 「居職人」トハ通例他人ノ招雇ニ依ラス自家ニ在リテ注文ニ應スルヲ云ヒ、染工、縫工、彫刻師、理髮職等ノ類是ナリ、彼ノ工匠、家根職ノ如キハ他人ノ招雇ニ應シテ業ニ服スルヲ常トシ此ト區別ヲ要ス、又製造人トハ大工場等ヲ設ケ多クノ製造ヲ爲シ之ヲ商人ニ賣捌ク者ヲ謂フニアラス、是ハ商法ノ支配ニ屬ス、單ニ一人一家ノ注文ヲ受ケテ一物一品ノ製造ヲ爲ス者ニテ靴屋、建具屋、指物屋ノ類ヲ云フ、此等ノ者ノ「仕事ニ關スル債權」トハ此等ノ者ヨリ注文者ニ對スル勞力

則

ノ賃銀、立替金等ノ債權ヲ主トシテ指稱シ、若シ其仕事ニ關シ此等ノ者ニ對シテ注文者カ債權ヲ有スルハ其債權ヲモ包含ス、殊ニ此「仕事ニ關スル債權」ト云ヘ

編

ルニ付テハ廣ク解釋シ其仕事ノ材料ニ關スル債權ヲモ包含ス可シ、舊法典第九百五十九條ニハ職工カ注文者ノ材料又ハ動産物ニ付キ爲シタル仕事ト自己ノ材料及ヒ動産物ニ付キテ爲シタル仕事トニ依リ其債權ノ時効ヲ異ニセシモ本法ハ

本條列記ノ諸債權ハ亦日常ノ需用ヨリ生スモノニシテ其辨濟ハ通例最モ迅速ナル可ク、且其取引頻繁ニシテ一々證據ヲ具備シ得サルモノナルヲ以テ其債權ノ關係ヲ速ニ確定セシムルヲ必要トス、是レ亦其時効ノ期間ヲ短縮セシ所以ナリ

第一號 本號ハ日常需要品ヲ供給セシモノ、債權ニシテ彼ノ賣掛代金ニ外ナラス、故ニ左ノ二條件ヲ備フル場合ニ限ル

(一)債權者ハ其商業上ニ於テ賣リシコト 其生産者ナルト卸賣商人ナルト將タ小賣商人ナルトヲ問ハス唯商人ニシテ其商業上ニ於テ賣リシコトヲ要ス、故ニ非商人カ物ヲ賣リシモノ及ヒ商人カ其營業外ニ於テ物ヲ賣リシモノ例ハハ呉服商カ書畫ヲ賣リ飲食商カ刀劔ヲ賣リシモノ、如キ債權ハ本號ニ包含セス、第六十七條第一項ノ原則ニ從フヘキナリ

(二)債務者ハ其消費ノ爲メ買ヒシコト 即チ之ヲ買ヒシ者ハ商人ニ非ス消費者ナル可ク、自己ノ需要ノ爲ニ買ヒシ場合ニ限ル、故ニ生産者ヨリ卸賣商人ニ卸賣商人ヨリ小賣商人ニ其他商人相互ニ商業上賣買セシモノハ包含セス、尤モ商人ト

雖モ其商事外ニ於テ自己ノ消費ノ爲ニセシハ此限ニ在ラス、例ハハ呉服商カ自家飲料ノ酒ヲ買ヒ飲食商カ自家服裝用ノ呉服ヲ買ヒシカ如キハ則チ本號ニ包含ス

總 則 編

第二號 「居職人」トハ通例他人ノ招雇ニ依ラス自家ニ在リテ注文ニ應スルヲ云ヒ、染工、縫工、彫刻師、理髮職等ノ類是ナリ、彼ノ工匠、家根職ノ如キハ他人ノ招雇ニ應シテ業ニ服スルヲ常トシ此ト區別ヲ要ス、又製造人トハ大工場等ヲ設ケ多クノ製造ヲ爲シ之ヲ商人ニ賣捌ク者ヲ謂フニアラス、是ハ商法ノ支配ニ屬ス、單ニ一人一家ノ注文ヲ受ケテ一物一品ノ製造ヲ爲ス者ニテ靴履、建具、屋指物、屋ノ類ヲ云フ、此等ノ者ノ「仕事ニ關スル債權」トハ此等ノ者ヨリ注文者ニ對スル勞力ノ賃銀、立替金等ノ債權ヲ主トシテ指稱シ、若シ其仕事ニ關シ此等ノ者ニ對シテ注文者カ債權ヲ有スルハ其債權ヲモ包含ス、殊ニ此「仕事ニ關スル債權」ト云ヘルニ付テハ廣ク解釋シ其仕事ノ材料ニ關スル債權ヲモ包含ス可シ、舊法典（註）九百五十二ハ職工カ注文者ノ材料又ハ動產物ニ付キ爲シタル仕事ト自己ノ材料及ヒ動產物ニ付キテ爲シタル仕事トニ依リ其債權ノ時効ヲ異ニセシモ本法ハ

其區別ナク總テ本號ニ包含セシムルナリ

第三號 本號、教育ノ月謝金等ト稱スルモノ、外、衣食及ヒ止宿ノ代料ト云ヘ
ルハ亦專ラ其教育ノ關係ヨリ來ルモノニ限リ、普通ノ下宿料等營業ニ屬スルモ
ノハ包含セス、次條第而シテ教師及ヒ師匠等ヲ列記セシハ汎ク各種ヲ網羅スル爲
ニシテ學問、技術、游藝等ニ於ケル一切ノ師弟關係ヲ總稱ス、商工業ノ親方ト徒弟
トノ如キ亦然リ

第百七十四條 左ニ掲ケタル債權ハ一年間之ヲ行ハサルニ因リテ消滅ス

- 一 月又ハ之ヨリ短キ時期ヲ以テ定メタル雇人ノ給料
- 二 勞力者及ヒ藝人ノ賃金並ニ其供給シタル物ノ代價
- 三 運送賃

四 旅店、料理店、貸席及ヒ娯游場ノ宿泊料、飲食料、席料、木戸錢、消費物代價並ニ立替金

五 動産ノ損料

本條各號ノ債權ハ其辨濟最モ迅速ナルヲ常トシ、久シク請求セスシテ願ミサル
モノニ非ス、且其證據ハ日ヲ經ルニ從ヒ益、困難ナルニ因リ一年ノ最短期ヲ以テ

消滅スルヲト爲セリ

總 則 編

第一號 「雇人」トハ其業務又ハ生活ノ必要上使役ニ供センカ爲メ雇備セル者
ヲ云フ、番頭、手代、小僧、車夫、馬丁、乳母、針妙、婢、僕ノ類是ナリ而シテ此等ノ者ノ給料カ
月又ハ之ヨリ短キ時期ヲ以テ定メラレタル場合ニシテ其雇備契約ノ期限ハ之
ヨリ長キモ妨ナシ(月以上ノモノ例ヘハ每三月年二季又ハ毎年等)ヲ以テ定メタ
ル給料ハ第百六十九條ノ適用ニ歸ス)

本號債權ニ關スル一年ノ時効ハ其給料ヲ支拂フ可キ各時期ノ終ヨリ算起ス可
キモノトス

第二號 「勞力者」トハ主ニ勞力ノミヲ供スル者ニシテ工匠、石工、坊工、嚙駝師、土
方、人足等ヲ云ヒ、藝人トハ游藝ヲ以テ營業ト爲ス者ニシテ俳優、音樂師、落語家、講
談師、手品師、藝妓等ハ勿論、角瓶ノ如キモ亦廣義ノ解釋ニ於テ之ニ包含ス、而シテ其
供給シタル物トハ其勞力又ハ藝術ニ附從シテ供給シタル物例ヘハ嚙駝師ノ用
井タル樹竹、坊工ノ供給シタル壁土等ヲ謂フ

工匠、坊工、嚙駝師等カ一工事ノ報酬トシテ有スル債權ハ本條ニ非スシテ第百七

十條ニ包含ス可ク本條ハ其一日若干ノ賃金ヲ以テ勢力ヲ供セシカ如キ場合ニ係ル是レ識別ヲ要スル所ナリ

本號債權ニ關スル時效起算點ハ其仕事ヲ終リタル時又ハ其物ヲ供給シタル時トス

第三號 「運送賃」トハ運送人又ハ運送取扱人ノ運送ニ對スル報酬ニシテ車夫、馬車會社、瀛船會社又ハ鐵道會社等ノ債權ニ係ル

運送賃ハ運送ヲ依託セル時ニ支拂フヲ常トスルモ運送ヲ終リシ時ニ於テスルト亦妙シトセス故ニ慣習又ハ法律行爲ニ因リ之ヲ支拂フ可カリシ時ヨリ時效ヲ起算ス可キモノトス

第四號 本號中「貸席」トハ待合、貸坐敷等ヲ云ヒ「娛游場」トハ劇場、寄席、玉突場、見世物場等ヲ云ヒ、游船宿ノ如キ亦之ニ包含ス可シ而シテ「消費物代價」トハ劇場ニテ炭火ヲ供給シ料理店等ニテ烟草ヲ供給セシ類ノ代價ヲ云ヒ又「立替金」トハ旅店ニ於テ車代ヲ立替ヘ料理店ニ於テ藝人ノ賃金ヲ立替ヘシ類ヲ云フ但旅店、料理店等カ其營業上ニ於テ又ハ營業ニ關係シテ爲シタル立替金ニ限リ普通賃金ニ

對スル代位辨濟ノ如キ固ヨリ之ニ包含セス

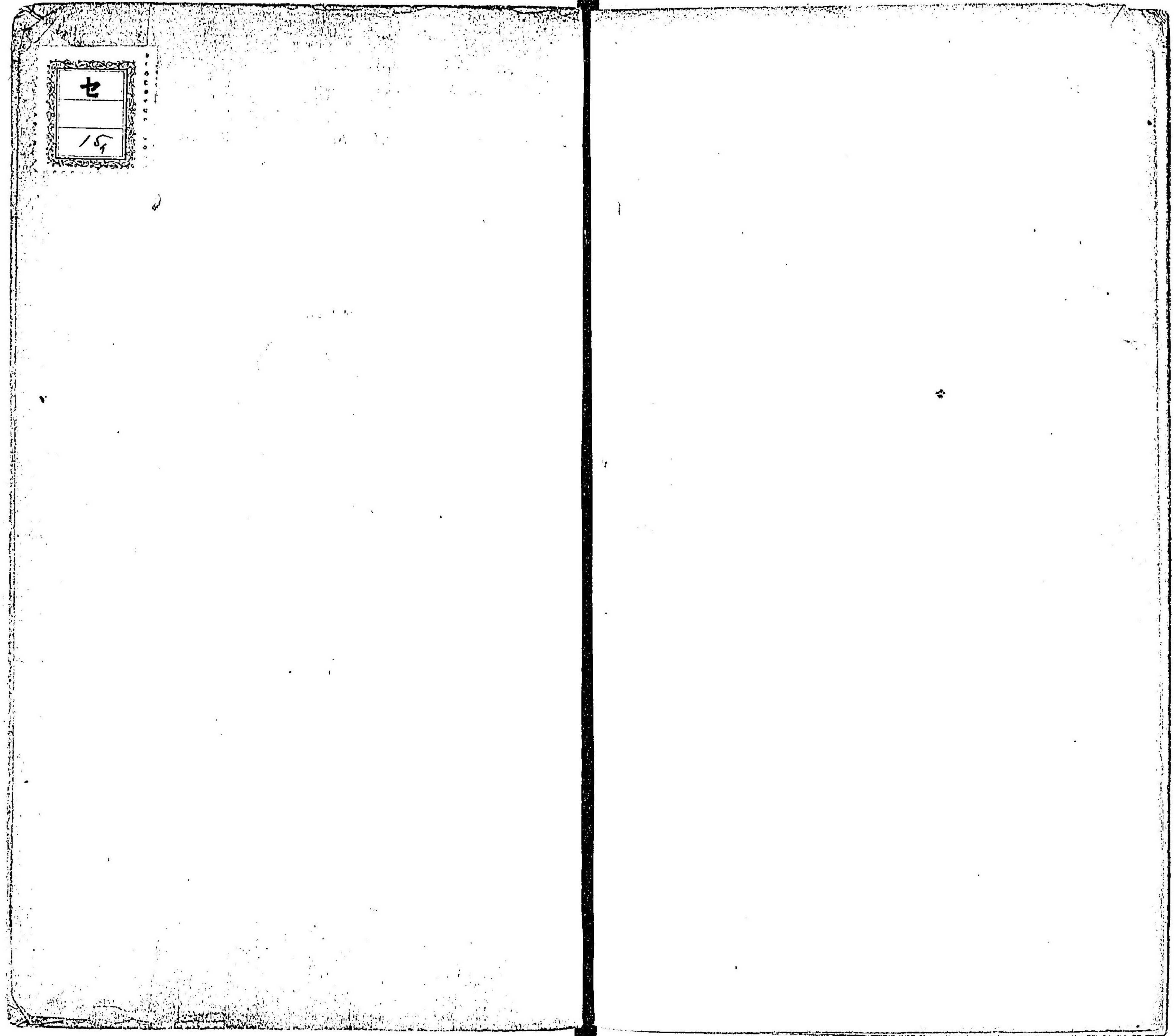
本號ノ起算點ハ其旅店、料理店等ヲ辭スル時ヲ以テ通例支拂ノ時ト爲スヲ以テ其時ヨリ起算ス可シ但旅店ノ如キ宿泊、久シキニ涉リ或ハ一週或ハ毎月ニ支拂フ可キハ其時ヨリ起算ス

第五號 是レ書籍、衣服、葬具、馬又ハ車ノ借賃等ヲ云フ本號ハ亦其動産返還ノ時ヲ以テ支拂ノ時期即チ起算點ト爲ス可シ

總 則 編

總 則 編

民法總則編講義卷之二畢



七
15



七
151

講法會第八期
法律政治講義錄

法律講義

岸本依雄

總則編卷之二

